

船の葬式

田 渕 清

中央二丁目

昭和十八年十二月下旬に入ろうとする頃、私は太平洋を北に向かう徴用輸送艦「名護屋丸」の夜中の甲板の上で、大きくピッチングする船の動きに身を任せて立っていた。中天にかかった満月の少し欠けた月光が、人影のない甲板を青く照らし、大きなうねりの波頭が銀色に光り、断続するエンジンの音が、よき静寂を呼ぶ世界にいた。

海軍に技術徴用を受け内地一か年の勤務の後、昭和十六年十月初旬、第一艦隊基地、トラック群島の夏島に着任、一週間後の八日に太平洋戦争の開戦の詔勅を聞いた。

赤道直下の常夏の島で任務に付きながら、内地の両親や友達を想い、生死を考えつつの二か年を過ごし、やっと内地帰還の命を受け、戦友達に見送られて、この艦に便乗した。僚船二隻と船団を組み出航して東北へ、北西へと敵の攻撃を避けるためジクザグ運行を続けながら、海と空だけの太平洋上を、幸い平穏な天候に恵まれ、内地へ向かって北上する十日間が過ぎた。

在島二年の間、緒戦は戦勝の報に酔っていたのも束の間、敗戦への想いがようやく濃くなっていった。内地に帰還する戦友の何人かを栈橋に見送った。敵の魚雷に乗船が撃沈され、幾日かの間、流木に乗って漂流し、見る影もない姿で島に戻って来た者もいたが、多くの者は還らぬ人となった。すでに制海権は敵の手中にあり、懐しい故国へ帰る喜びと、死への恐怖に心を揺られつつ、月に照らされた海面を眺めていると、大分北上したことを思わせる涼しい風が吹いてきた。

その次の日あたりから「艦すれすれに、魚雷が一発通過して行った」等と水兵の話を聞くと、急に緊張が高まって行った。我々便乗者は朝礼と食事以外は何の任務もなく、雑談に無聊の時を過ごしていたが、その頃から見張りの兵も増強され、眠れぬ私等も夜を甲板で海上を見つめて過ごした。

それから三日ほど経った夜も、私は星明かりの甲板に出ている。突然、艦ともの方の見張り兵が「後方三十度魚雷の航跡が近づきつつあり」と大声で叫ぶのを聞き、急ぎ船尾の方に行き海面

の彼方を見つめた。照明弾が打ち上げられて昼のように明るくなった海面に、大魚が艦を追尾するように海面が線となって盛り上がり近づく魚雷の航跡を見た。その瞬間、本艦は敏捷な動作で艦首の彷徨を急角度で変えると艦尾が振れて、間一髪魚雷の航跡は艦尾のわきを通過して行くのが見えた。再び照明弾が打ち上げられ、艦尾に置かれてあった小型のドラム缶のような爆雷が二個続けざまに投下された。少し間を置いて海面に稲妻のように起伏が走り、鈍重な爆発音がして、自分の足元にも不気味な振動が伝わってきた。目に見えぬ海中の敵との一瞬の壮烈な戦いを私は初めて体験した。

やがて何事もなかったかのように、再び静寂な夜が戻って来て、単調なエンジンの音が伝わってくる甲板に立ちつくして暗い海を見てみると、死への恐怖が実感として湧いてきて、吹き付ける冷たい風に身震いした。

「名護屋丸」は排水量三千トン位で、海軍に徴用されて以来、主に危険な砲弾等の爆発物の輸送を任務とし、船底の隔壁は頑強に造られているとのことであった。もう三年以上も太平洋を往復して、塗装も剥落して長い航海を物語っていた。乗組員は大佐の船長以下将校、下士官、及び兵三十名位で、皆老練な感じで親切であった。貨物船なので客室はなく、我々便乗者の約一二〇名位は、木造の幅六〇センチ位の一段高い通路で、升席のように幾つかに仕切られた艦の前後のダブル（船底の室）

に、半々に別れて収容されていた。二つの狭いタラップで甲板に通じていて、窓はなく、昼夜の別なく天井から下げられた数個の裸電球が赤茶けた光を投げている陰気な室だった。寝る時以外は食堂か甲板で、不安と希望の入り混じった無聊の時を過ごす十数日が経った。

十二月二八日の夜十時頃、私は甲板からタラップを降りて、ダブルの冷たい薄縁の上に横になり、正月元旦は船の上か、内地の我が家の畳の上かと思いつつ、高い天井に吊るされた裸電球を見上げていた。

やっと眠りに入ろうとした時、大音響がして艦が地震のように振動すると同時に床が傾いて行くのを感じ、飛び起きるなりタラップを夢中で駆け登っていた。暗い中甲板へ出ると数人の船員が何か叫びながら走り回っているのが見えた。さらにタラップを駆け登り傾斜した上甲板へ出ると、一人の下士官が艦側に吊ってある救命ボートに乗り込むのが目に入り私も続いて飛び込んだ。滑車で吊った何本かのロープの止め金物はずした方が、一本がはずれないでボートが傾いて止まった。甲板にいた一人の水兵に、

「切るものを持ってこい」

と私が叫ぶと、鈍のようなものを持ってきてロープを叩き切ってくれたので、ボートは少し傾きながらも降下して着水した。隣で降下していたボートがバランスを失って垂直に海中に突っ

込み、人影が海に投げ出されるのを暗い中で見たが、我々は夢中でオールを漕いで本船から三〇〇メートルほど離脱して一息入れた。三十名位収容出来るボートには、下士官一名、水兵三名、便乗者五名位しか乗っていなかった。月も星もない真っ暗な海上に目を凝らして見ると、かすかに黒く船首を海中に没して傾いた艦影が見えた。

「本艇はこの距離を保ちつつ、本艦を周回して状況を見る。あまり離脱すると味方の救助の目標外に出ることになる」と下士官が静かに指示した。六本のオールを交代で漕ぎながら、暗の中に傾いた本艦の黒い影を確かめつつ波にもまれて周回していた。二度ほど、本艦の近くから助けを呼ぶ声を聞いた。船底に溜まった海水が裸足に冷たく、オールを握る腕も疲れて力も抜けそうになった頃、海に微光が射して来て早い速度で朝が来た。昨夜、無我夢中で離脱してきた「名護屋丸」の傾いて浮いている姿が、朝陽の光の中にくっきりと見えてきた。ボートを本艦に近づけると、艦長命令で「本艦に戻れ」とのことで縄梯子を登ってやつとの思いで甲板に辿り着いた。

雲間から時々陽の射す、傾いた甲板に、本艦に留まっていた仲間達が集まって来て、互いに無事を祝し合った。話しによると魚雷三発を受け一発は回避したが、一発は艦側に当たり、いま一発は前方のダブルに侵入して爆発、浸水して室にいた便乗者は全員死亡したとのことだった。

正午近くになると内地の基地から来たのか小型の駆潜艇が二隻、速いスピードで敵潜水艦を求めて疾走するのが見えた。散会していたのか二、三日姿を見せなかった僚船が近くに寄って来て、航行不能の本艦をワイヤーで結び、内地まで曳航することになった。浸水する海水を電動ポンプで排水していたが、夕方頃モーターが焼き切れて手動ポンプに替えられ、我々も全員協力することになった。私も狭い中廊下を通して、ポンプの据えられている中甲板の端に行った。旧式なシーソー式手押しポンプを二人の水兵が操作していたが、友人と二人で交替した。脚もとより二メートルほど下から船首にかけて傾斜した船体は海面下にあり、艦首の高くなった砲塔が据えられた機銃とともに間断なく波を被っていた。その砲塔の回りに、取り残された七、八人の人影が波に揉まれているのを見た。夕暮れの中、顔もさだかに見えないが、手や体を手摺りに結び付けて、時々手を振って声もなく助けを求めている者、ぐったりと波に任せている者の姿を見ながらポンプを押し続けた。船員の話によると、ロープを張り渡したり、ボートを出して海に飛び込むよう指示したが、その気力もなくて万策つきたそうである。

暗い夜が海の上に来て、僚船に曳かれた「名護屋丸」は遅い速度で北上を続けた。敵の魚雷攻撃への恐怖は一層強く、皆寒い風の吹く傾斜した甲板の上で、僚船の喘ぐようなエンジンの音を聞きつつ、不安の一夜を明かした。

翌日、昭和十八年十二月三十一日の夜が開け、水平線に太陽が昇った。私は気になって艦首の砲塔を見に行った。手摺りに手や腰を結えたままの全裸になった青白い死体が四個波に揺られて残っていた。この悲惨な影像はその後、海を見るたびに鮮烈に蘇った。

正午近くになって艦長命令がでた。

「海水の侵入が多く本艦は放棄する。僚船に全員移乗せよ」と言うのである。曳航のロープが外され、本艦と僚船が一〇〇メートル位の間隔を保って平行に停止し、本艦からはロープが、僚船からはネットが舷側に降ろされその間の海面に一隻の駆潜艇と二隻のボートが配された。エンジンの音も止まり静かな時間が流れて、私は友人達と甲板の片隅の陽溜まりに座り込んで持ち出された食料品や一升瓶の酒の山を眺めていた。私は隣の酒好きの友人に「どうだ、一杯やるか」と言ったが、友人は無言でかすかに笑っただけだった。傍へよって来た年配の下士官が着用していた救命胴衣を外して、私に貸してくれながら「自分は満州（中国東北部）で召集され、残してきた妻子とも三年も会っていませんよ」と淋しそうに笑った。順番を待つてロープを滑り降りボートに乗って僚船の舷側のネットをよじ登り、平坦な甲板に着いた。私は夢中で気が付かなかったが、友人に言われて両手のひらを見ると、皮がべロりと剥がれて血だらけだった。本艦を降りる時ロープの摩擦でやられたと気が付き、

垢だらけの手拭いを裂いて巻いた。

最後に艦長と副官が艦旗を降ろして、全員僚船に移乗が終わった。後日聞くとところによると、艦長は「名護屋丸」と生死をともにすると主張したが、部下の言を入れて退艦したそうである。

甲板に集合が命ぜられ、艦長を右翼に兵員全員が横隊に整列し、我々もその末端に並んだ。僚船は「名護屋丸」を中心に三〇〇メートル位の距離をおき、左廻りに回航を始めた。副官の号令に従い、去ってきた無人の艦に向かって直立不動、別れの挙手の札の姿勢をとると、ラッパ手の吹く葬送の音が蕭々^{ショウショウ}と響き渡った。太平洋上に厳粛な時間が長い間流れ、全員の目は「名護屋丸」を凝視し続けていた。ふと脇に並んだ下士官の顔を見ると、大粒の涙が真っ黒に陽焼けした頬を伝わり流れていた。生死をともに長い年月操航して来た艦に別れを告げる今、さぞ断腸の想いであろうと考えると私の目からも涙が吹き出て前方が霞んだ。回航が終わり北への進路に入った時、古武士のような長身の艦長の訓示があつて、船の葬式は終わり散会した。

私は放心したように甲板の手摺りにもたれて遠くへ行くと、「名護屋丸」を見続けていた。真っ赤に夕焼けした空を背景に、艦首を海中に没し三十度位に傾いた、寂しげな艦の黒いシルエットが、視界から消えて夕闇が来た。

その夜も冷たい風の吹く暗い甲板で、うずく両手を握りしめ

ながら、どうやら無事内地の土を踏めそうな希望と、太平洋の海底に艦艇とともに没するであろう戦友達の幻影が交錯する想いのなかで、星の瞬きを見つめつつ、また眠れぬ夜を過ごした。昭和十九年元旦の朝が、明るい朝陽の射す甲板にも来た。昨夜十一時三〇分「名護屋丸」は海中に没したとの報が入った。日本列島が敵潜水艦に完全に包囲された状況の中、無事脱出し得たことは私の幸運だった。

あれから五〇年近い歳月が過ぎたが、茜色に染まった夕焼け空を見る度に、あの船の葬式と、その一連の悲しき思い出は、鮮明に脳裏に蘇ってやまない。

